報　　告

子どもの考える理想的な小児医療

徳　善　由　深

〔論文要旨〕

小児医療に期待されることを明らかにするために，北海道から沖縄県の0歳から15歳の子どもに，①医師が着る服は何色がよいか，②どのような医師が好きか，③どのような診察室で診察をしてもらいたいか，④今までの医師の診察でいやだったことは何かの項目について質問紙調査をした。

結果として，①に関しては白い服（白衣）を好む子どもが全体の5割を占めた。②に関しては，優しく思いやりのある医師を好む子どもが全体の6割を占めた。③に関しては全般に子どもが落ち着く場所をそのまま診察室に持ってきて欲しいという傾向があった。④に関しては「注射」が全体の5割を占め，痛みを伴う治療は子どもにとって苦痛である傾向がみられた。

Key words：小児科医，診察室，実態調査，白衣の色，子ども，小児医療

Ⅰ．はじめに

厚生労働省が発表した人口動態統計で合計特殊出生率が2003年は1.29となり，戦後最低となった。「出生数は今後大幅に低下する」と予測されている中，少子化傾向に歯止めはかかりそうにはない。子どもは，これからの世の中を背負っていく予備軍であり，社会全体の活力の源である。

私は幼い頃，よく風邪を引き病院に通った。いつも見てくださった女性の医師は必ず私の方を見て病状の説明やアドバイスをしてくれた。言葉や態度も私を一人の人間としてのものだった。小さい頃から「大きくなったら何になるの？」と聞かれる度に私は，いつも「小児科医」と答えていた。今も変わらない。

何故厳しいと言われるその道を選んだのか自分でも良く分らないが，「子どもが好き」「人の役に立ちたい」と言う単純な気持ちが正直なところだが，病気で命を奪われていく子どもを一人でも少なくしたいとも考えている。

そこで，小児科医になる前に，医療関係者の医師や看護師，受け付け業務の人にどのような事が期待されてるのかを知りたく，保護者（親）に対しては「病院選択の基準」「受け付けや看護師の対応」「医師の態度や言葉」「相談しやすい医師」「子どもを育てる時の苦労」，また，子どもに対しては「好きな医師の白衣の色」「好きな医師」「好きな診察室」「受診時にいやだったこと」を郵送法で調査した。今回は，子どもの回答に焦点をあてて報告する。

Ⅱ．研究目的

子どもの考える理想的な小児医療を明らかにする。

Ⅲ．調査対象および方法

調査対象は，北海道から沖縄県に住む0歳～15歳の子どもを持つ親とその子ども（285組）である。

調査方法は郵送法で，平成14年7月10日～8月30日に実施した。

A Study of Ideal Medical Care Surveyed for Children
Yumi Tokuzen
京都教育大学教育学部附属高等学校
別刷請求先：徳善由深　〒606-8395 京都府京都市左京区東丸太町5-103
Tel/Fax：075-751-6812

〔1611〕
受付 04. 1.27
採用 04. 9. 9

Presented by Medical*Online

全国の都道府県のうち計16県（北海道・東京都・神奈川県・石川県・岐阜県・三重県・滋賀県・京都府（２名）・兵庫県・鳥取県・岡山県（３名）・香川県・高知県・長崎県・鹿児島県・沖縄県）に在住する知己19名に「お知り合いで０歳から15歳の子どものいる方に本調査票セットをお渡しください」と調査票配布（知己１人あたりにつき15通の調査セットを送付）を依頼した。

Ⅳ．結　　果

回収率は90.2％で，有効回答率は86.8％であった。内訳は乳幼児（０～６歳）が28.6％・学童（７～11歳）が44.3％・青年（12～15歳）は27.9％であった。

男女比は男児：42.4％・女児：57.6％であった。乳幼児については，保護者（親）が回答をした。

１）子どもが好んだ服の色は（複数回答）男女ともに白色が１番多かった。白色を選んだのは95名であり，そのうち男子は41名（21.4％）で女子は54名（28.1％）であった。第２位はピンク色で39名中男子は10名（5.2％），女子は29名（15.1％）であった。第３位は青色で20名中７名（3.6％）は男子で女子は13名（6.8％）であった。第４位はオレンジ色であり，13名中男子は５名（2.6％），女子は８名（4.2％）であった。第５位は黄色で11名中男子は２名（1.0％）で女子は９名（4.7％）であった。第６位は緑色で７名中男子は４名（2.1％），女子は３名（1.6％）であった。第７位は黒色で男子が１名（0.5％）であった。その他は赤色・普通の服の色・病院の色・水色・色付きなどであった。しかし，白衣を着ないほうがよいと言う意見はなかった（**表１・表２**）。

２）どんな医師が好きかについて乳幼児では好きな医師の第１位は「やさしい・思いやりのある」が46.3％，第２位は「女性」が7.5％，第３位は「おもしろい・楽しい」・「きれいな・かわいい・かっこいい」が3.8％であった（**表３**）。

学童期では，第１位は「やさしい・思いやりのある」が61.5％，第２位は「おもしろい・楽しい」が9.2％，第３位は「女性」・「ちゃん

表１　男児の好む服の色

n＝77

好む色	名	割合（％）
しろ	41	21.4
青	13	6.8
ピンク	10	5.2
オレンジ	5	2.6
みどり	4	2.1
黄色	2	1.0
くろ	1	0.5
その他	1	0.5

表２　女児の好む服の色

n＝115

好む色	名	割合（％）
しろ	54	28.1
ピンク	29	15.1
黄色	9	4.7
オレンジ	8	4.2
青	7	3.6
みどり	3	1.6
その他	5	2.6

表３　乳幼児の好きな医者

n＝80（複数回答）

好きな医者のタイプ	件	割合(％)
やさしい・思いやりがある	37	46.3
理解できない・わからない	13	16.3
なし	11	13.8
女の人	6	7.5
おもしろい・楽しい	3	3.8
きれいな・かわいい・かっこいい	3	3.8
笑顔	1	1.3
知的・頭のいい	1	1.3
説明をしてくれる	1	1.3
お母さんみたいな	1	1.3
ハートの服を着ている	1	1.3
怒らない	1	1.3
愛称で呼ぶ	1	1.3

Presented by Medical*Online

と治療できる」が2.8%であった（**表4**）。

青年期では，第1位は「やさしい・思いやりのある」が40.6%，第2位は「話しやすい」が10.9%，第3位は「おもしろい・楽しい」が7.8%であった（**表5**）。

3）どんな診察室がよいかについては，第1位は「清潔・きれい」が20.7%，第2位は「おもちゃ・キャラクターがある」が13.8%，第3位は「絵・写真がある」・「明るい」が8.8%あった。以降，「落ち着く・安心できる」が7.8%，「広い」が5.5%，「かわいい」「プライバシーが守られた」「植物がある」「威圧感のない」「楽しい」などであった。「薬の臭いのしない」「家のようなところ」「音楽の流れているところ」という意見もあった（**表6**）。

4）病院にかかっていやだったことでは，第1位は「注射」が48%，第2位は「長時間待たされた」・「痛いことをされた」が10.6%，第3位は「先生がいや」が9.8%であった。以下「病院の臭い」「薬が多い」「入院した」「実習生の見学」「病気がうつった」「言葉使いが幼い」「おもちゃが不潔」という意見があった（**表7**）。

表4　学童の好きな医者

n＝109（複数回答）

好きな医者のタイプ	件	割合(%)
やさしい・思いやりがある	67	61.5
おもしろい・楽しい	10	9.2
女の人	3	2.8
ちゃんと直して・治療できる	3	2.8
きれいな・かわいい・かっこいい	2	1.8
笑顔	2	1.8
知的・頭のいい	2	1.8
信用できる	2	1.8
子供たちのことを考える・気持ちが分かる	2	1.8
めがねをかけた	2	1.8
普通	2	1.8
なし	2	1.8
説明をしてくれる	1	0.9
話しやすい	1	0.9
診察の正しい	1	0.9
丁寧に診察	1	0.9
かわった	1	0.9
きちんとした	1	0.9
怖くない	1	0.9
遊んでくれる	1	0.9
頑張りや	1	0.9
理解できない・わからない	1	0.9

表5　青年の好きな医者

n＝64（複数回答）

好きな医者のタイプ	件	割合(%)
やさしい・思いやりがある	26	40.6
話しやすい	7	10.9
おもしろい・楽しい	5	7.8
手際がよい・テキパキと行動する	3	4.7
笑顔	2	3.1
明るい	2	3.1
なし	2	3.1
女の人	1	1.6
きれいな・かわいい・かっこいい	1	1.6
知的・頭のいい	1	1.6
説明をしてくれる	1	1.6
信用できる	1	1.6
子供たちのことを考える・気持ちが分かる	1	1.6
めがねをかけた	1	1.6
診察の正しい	1	1.6
親しみやすい	1	1.6
注射をしない	1	1.6
医療ミスしない	1	1.6
医者らしくない	1	1.6
安心させてくれる	1	1.6
尊敬できる	1	1.6
感じのいい	1	1.6
はっきりしている	1	1.6
穏やか	1	1.6

Presented by Medical*Online

表6　どんな診察室がよいか
n＝217（複数回答）

診察室	件	割合(%)
清潔・きれい	45	20.7
おもちゃ・キャラクターがある	30	13.8
明るい	19	8.8
絵・写真がある	19	8.8
落ち着く・安心できる	17	7.8
広い	12	5.5
かわいい	10	4.6
その他	9	4.1
プライバシーの守られた	9	4.1
植物がある	7	3.2
威圧感がない	6	2.8
たのしい	6	2.8
白い壁	5	2.3
本がある	5	2.3
音楽が流れている	4	1.8
静か	4	1.8
家のようなところ	3	1.4
医療機器の少ない	2	0.9
薬の臭いのしない	2	0.9
ビデオがある	2	0.9
安全な	1	0.5

表7　病院でいやだったこと
n＝123（複数回答）

いやだった事	件	割合(%)
注射がいや	59	48.0
長時間待たされた	13	10.6
痛いことをされた	13	10.6
先生がいや	12	9.8
薬が多い	3	2.4
入院	3	2.4
病院の臭いがいや	2	1.6
ぬいぐるみがいや	2	1.6
座薬を入れられた	1	0.8
実習生に囲まれた	1	0.8
病気がうつった	1	0.8
診察室で1人だった	1	0.8
通院回数が多い	1	0.8
言葉づかいが幼い	1	0.8
病院が怖い	1	0.8
おもちゃが不潔	1	0.8
暖房が暑すぎて不快だった	1	0.8
その他	7	5.7

V. 考　　察

1）白い服を好んだのは「白い服を着ているのはお医者さん」というイメージが子どもの中にあるからと考えられる。普段通っている病院の医師は白い服を着ていて見慣れている。歯医者や耳鼻科，眼科，そして学校の養護教諭も白い服を着ていることが多いので「ケガや病気を診てくれる人は白い服を着ている」というイメージのためと考えられる。

ピンク色が第2位なのは，女の子に人気があり子どもにとって「かわいい」「きれい」を表現する色でお医者さんにも着てほしいという思いが強いのであろう。また，男の子にもピンク色が好きという意見があった。これは普段母親が着ている服や持ち物にピンク色が使われており，その色を見ると安心するという理由が考えられる。

青色が第3位なのは，青色は人をリラックスさせる効果があり，病院という緊張する場で，リラックスしたい（緊張をとりたい）願望が自然とこの色を選ぶ結果につながったのかもしれない。その他はオレンジ色・黄色・緑色と明るい色を好む子どもが多かった。

2）どんな医師が好きかについては，子どもの5割が「優しい，思いやりのある」と答えていた。親は「子どもの命」を第一に考える傾向があり，病院や医師を選ぶ条件には「判断力・腕のよさ」が最優先される。しかし，子どもはその人がもつ雰囲気を敏感に感じとり，柔らかい雰囲気を持つ人を好む。乳児期から青年期にかけて，子どもは成長発達に伴い人のやさしさや思いやりを感じ取る感性が高まっていく。ま

Presented by Medical*Online

た，幼児期・学童期前半の子どもは見慣れない人や場所を怖がったり，学童期後半からは健康に関心が高まり不安も起きやすいため，やさしく思いやりのある医師が好きというのは，納得がいく結果である。

「おもしろい，楽しい人」はどの時期にも上位であった。子どもにとって診察はドキドキと緊張するものだが，おもしろい話をしたりユニークな楽しい医師に診察してもらうことができれば緊張が解けリラックスでき，診察も苦にはなりにくい。

「話しやすい人」に関しては，全般的に子どもは難しい言葉を使って病気の話をされても分からないことが多い。同じ目線（理解力）で話をしてくれると子どもには通じやすいと思われる。青年期では第2位にあげられていた。多感な時期に自分のことを話したり，聞かれたりするのは不快に感じることが多い。そんな時に話しやすい医師は，とても心強く頼もしい存在となる。この時期は人（医師）の人間性も求めていき，物事すべて筋道の通った合理性を求めるようになるため診断技術も意識しはじめると思われる。

親も子どもの病気について医師に聞く時は，話しかけやすく質問しやすい，そして分りやすく説明をしてくれる人を選ぶ。この点は親子共通している。

「女の人」が多かったのは，学童期後半の女子なら男の先生に診てもらうのは恥かしいという人も大勢いる。また，女の先生なら幼児や学童期の子どもは何でも話せるし，母親代わりに話を聞いてもらえて安心できると思われる。また，女性は男性に比べて柔らかい印象がある

3）どんな診察室がよいかについては，「清潔・きれい」「おもちゃ・キャラクター」「絵や写真がある」「明るい」「広い」「落ち着く安心」など意見があった。診察室は診療に直接関係する部屋であり，病気の子どもと大人が集まる場となるため，感染のことも考え清潔であり安全に過ごせる配慮が必要になる。子どもを対象とする診察室に必要なことは，色彩や飾りつけに工夫を凝らし安心して過ごせる環境を整えることである。その上で子どもが落ち着ける音楽や本や植物などがある自分の家のような場所を診察室にそのまま持ってくることが望まれる。病院の診察室独特の雰囲気を好む人はいなかった。

プライバシーの保護面では，他の人を気にすることがないように個別の部屋や診察中の声が聞こえない場所が理想である。学童期後半から青年期には特にこのような環境を整えてほしいという意見が多かった。全ての人の願いを叶えた診察室をつくるのは難しいが，病院側がこのような子どもの意見をとり入れて考えていくことが重要である。

4）病院でいやだったことについては，5割の子どもが「注射」をあげていた。注射は痛いしその痛みを身体が覚えていると，自然に次の注射の際も身体が拒否反応を起こす。更に動かないように看護師に押さえつけられ，いやな思い出として「注射」が残ってしまう。

医師は注射の技術を磨き痛くないように実施する必要性があると思われる。

次に「長時間待たされたこと」が多かった。熱が出ている時など身体がだるいのに長時間待つことは更にしんどい。患者の対応時間に対して，上井ら[1]は「看護婦は患者の気持ちを一度受けとめ，その上で優先順位を考えて対応し，患者にはその状態に応じた速やかで適切な言葉かけが必要である」と述べている。直ぐに患者に対応が出来ない時には明確に待ち時間を伝え了解を得ておくように改善を考える必要があると思われる。

「痛いことをされた」は第3位であった。痛み（痛いこと）は，健康問題をもつ子どもが，それぞれの病気・治療・検査・処置に伴い体験する症状のひとつである。痛みは不快を伴う症状のひとつであり，原因に関係なく軽減・解消すべきものである。病院で行う検査や処置は子どもにとり未知の体験であり不安と恐怖を感じる。小児用の特殊な用品を使用したり，大人と違う方法がとられたりする。多くの子どもにとり検査・処置は馴染みがなく，また，必要性や方法や痛みの有無などを理解するには年齢的にも限界がある。これらに対し正確かつ迅速そして苦痛を最小限に行うことが要求される。注射と同じで「痛いこと」があると診察自体が苦痛になってしまう恐れがあるため，子どもと積極

Presented by Medical*Online

的に様々な方法でコミュニケーションをとり不安感を緩和できるようにする必要性がある。

「先生がいや」が多かった。高圧的態度や事務的な医師も世の中にはいるであろう。佐藤ら[2]は特に医師に関して「クレームが発生することはすなわちコミュニケーションが上手くいかなかった事を意味する。その原因としては聞き手の態度や理解力，固定観念，話す側の態度や表現力不足などがあるが，いずれにしても人間の生命を担う仕事としてはそこまでの配慮が求められている」と述べている。特に子どもは医師の前では緊張感もあり，自分の伝えたいことが話せなくなる。

「いや」とは感情的・情緒的な面が影響してくる。子どもは感性が鋭いので，医師を嫌うことも多々ある。医師は初めての診察の時から親と子どもに対し丁寧な対応が大切になる。

「いやな体験をしていない」という意見もあった。診察や検査などで痛いことやしんどいこともあるが，なんらかの影響で最終的にはいやな思い出はなくなっていると考えられる。それは病院の雰囲気や施設・設備がよいのか，医師の腕がよいのか，医師の人間性がよいのか理由は様々であろう。

いずれにしても子ども達の多くがこのように言える小児医療にしていかなければならないと考える。

V. まとめ

1）子どもの好む医師の白衣の色は，①白色，②ピンク色，③青色，④オレンジ色，⑤黄色，⑥緑色の順であり，明るく落ち着く色であった。

2）子どもの好きな医師は，①やさしい・思いやりがある人，②おもしろい・楽しい人，③女の人・話しやすい人の順であった。子どもの成長発達に伴い，好きな医師のタイプが変化する。

3）子どもの好む診察室は，①清潔・きれい，②おもちゃ・キャラクターがある，③絵・写真がある，④明るい，⑤落ち着く・安心の順であった。清潔感と子どもの欲求にあった自分の家の雰囲気の部屋が好みとなる。

4）病院でいやだったことは，①注射，②長時間待たされた，③痛いことをされたの順であった。その他に，「いやな体験をしていない」という意見もあった。いやな体験をしたか否かは，病院の雰囲気や医師の腕と人間性によって影響を受けている。

VI. おわりに

今回，小児医療に期待されていることを親(保護者)とその子どもにアンケート調査を行った。そして，多くの人から生の意見をたくさんいただいた。その中で小児医療に求められていることの一端をみることができた。また，大人の意見にばかり注目するのではなく，子どもの意見を取り入れた医療を考えることの重要性にも気づくことができた。小児医療を子どもの目から見た文献はほとんど見つからなかった。今後は今回学んだことを心に留めて更に小児医療について考えていきたい。

謝辞

調査にご協力いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

引用文献

1) 上井陽子，梅次美奈子，大崎清美他：患者が好感をもてた看護婦の言動の質的分析．第32回看護総合．2001年.p26-27.
2) 佐藤正人，林　茂：接遇に対するクレームの検討．第52回日本病院会雑誌．2003年．p123.

参考文献

1) 鎌田　實：病院なんか嫌いだ～「良医」にめぐりあうための10箇条～．集英社．2003年.
2) 秋山泰子他：小児看護学１．新版メジカルフレンド社．2000年.
3) 宮崎和子他：看護観察のキーポイントシリーズ小児．中央法規出版．1990年.
4) 中野　寛他：国民衛生の動向．厚生統計協会．2003年.
5) 奈良間美保他：系統看護学講座専門22　小児看護学１.医学書院.2003年
6) 柳澤正義：21世紀の小児医学・医療を予見する～日本における小児医療のあり方～　小児科 vol.42 No.1 2001年.
7) 武石哲子：医療人としての接遇．日本病院会雑誌．2003年.

Presented by Medical*Online